

で、これらも経文と密接に関連していることがわかる。

日蓮が寿量品について考えるとき『法華文句』の智顗の見解をおおいに参考としていたことが再確認できた。日蓮が仏教研鑽の成果としての要文集を整理して『法華経』の余白に書き入れたと考えられるが(浅井圓道『上古日本天台本門思想史』、北川前肇『日蓮教学研究』)、書き込みの目的を知ることが容易ではない。注記の要文それぞれについて詳細に検討し、『法華経』の経文の内容と比較することが必要である。近年、『注法華経』に東密・台密関係の典籍の名が多くみえることによつて、日蓮の教義の根底に密教思想が存在していると指摘する意見がある。しかし、空海の著作の例にみられるように、日蓮は反論するための準備として注記する場合も多い。このことに充分留意する必要があるだろう。

山川智応の浄土教批判

前川 健 一

近代において田中智学を中心とする国柱会の日蓮主義は、単に日蓮解釈や日蓮系宗教のみでなく、社会全体に大きな影響を与えた。研究史的にも着実な蓄積がなされてきてはいるが、それらはおおむね社会思想的な関心に偏っているように思われる。田中智学のそもそもの出発点が、当時の日蓮宗で重視されていた優陀那日輝の教学への反発であり、国柱会の活動の基本が日蓮教学の刷新とその伝道にあったことを考えると、田中な

いし国柱会のトータルな理解のためには、彼等の教学的達成それ自体を検討する必要があると思われる。

田中は、大正時代以後は国体思想に主軸を移したと一般に言われるが、この時期以後、日蓮教学の面を主として担うのが、山川智応をはじめとする田中の直弟子たちであり、さらには田中の実子である里見岸雄らであると言える。田中は『本化妙宗式目』及び、その講義という形で、独自の日蓮教学の編成を行ったが、田中の場合、用語の面でも発想の面でも、近世的な日蓮教学の枠組みに強く規制されている。それに対して、少なくとも本人の意図としては、より開かれた形で日蓮を語ろうとしたのが、山川であり、日蓮教学の近代化という点でも重要な位置に立っていると思われる。

山川智応(一八七九—一九五六)は、大正五年(一九一六)、『日蓮聖人と親鸞』(新潮社)を、大正十二年(一九二三)、『日蓮聖人と法然』(天業民報社)を出版した。山川の諸著の特徴は、日蓮の浄土教批判自体を發展させるというよりも、日蓮の生涯・教義体系などと、親鸞・法然のそれとを比較すること、日蓮を高く評価するという方法を採用していることである。山川は事蹟・人格・教義という三項目を立てて比較をしているが、ここで重要なのは、事蹟・人格の比較に大きなウェイトが置かれていることである。各宗の価値を開祖の人格に集約し、比較を行うという方法は、結果として、大乘非仏説論をめぐる問題を回避することになっている。山川自身は明言していないが、日蓮自身から始まり、近世にいたるまでの、日蓮宗と浄土宗諸派との間の大きな争点が、浄土三部経と『法華経』と

の優劣、特に天台学の五時教判を前提とする両者の前後関係をめぐるものであったことを考えると、こうした点に触れることなく浄土教批判を構成したのは、意識的な方向転換であったと見ることが出来る。もともと、「人格」を焦点としたために、山川自身の企図するところとは異なり、親鸞・法然・日蓮のいづれを選ぶかは主観的な好みの問題と化しているように見える。

教義的な面で山川が強調するのは、親鸞・法然には現実社会、特に国家への関わりが無く、日蓮のみが現実社会に働きかけることができるという点である。

山川は、浄土教を「厭世教」・「単心靈」・消極的、日蓮の仏教を「革世教」・「心靈現実」・積極的といった性格づけをしている。こうした二分法は、現在でも日蓮信奉者の間に根強く残っていると思われるが、歴史的に見た場合、このような性格付けは近代特有のものと言わなければならない。特に問題になるのは、日蓮を「革世教」すなわち社会関与的・現実変革的と見なすことである。国柱会そのものは一種の「革世教」であったわけだが、自らの立場を日蓮その人に遡らせている面がある。日蓮が「革世教」であるという性格付けそのものが、国柱会ないし田中・山川らの思想の総体的な検討をもとに再検討される必要があるのではないか。山川の個々の論点とはかくとして、そうした近代的な日蓮像の枠組みそのものを再検討することが、近代日蓮主義を含む日蓮系思想の研究を深化する上で重要であろうと考える。

近代仏教と須弥山儀

——近代的自然観と仏教——

岡田正彦

梵暦運動は、江戸時代の仏教僧・普門円通(一七五四—一八三四)を開祖とする仏教系の思想運動である。幕末から明治初期にかけて、円通の体系化した「梵暦」と呼ばれる「仏教天文学」の理論をもとに、多くの門弟たちが各地で活発な活動を展開した。その運動の規模は、同時期の仏教系の思想運動では特筆すべきものである。

円通の門弟は、生前に千人を超えていたと言われているが、明治期以後は急速に衰えた運動の実態を把握する研究は少ない。本発表は、こうした梵暦研究の実態調査の一助として、各地に現存する須弥山儀(類)を調査した結果の報告である。

「須弥山儀」は、地球説と地動説を前提とする、西洋近代科学の自然観を論駁するために製作された、須弥山説にもとづく円盤状の世界像をモデル化した宇宙儀である。円通をはじめ、梵暦社中の人々が製作に関わった須弥山儀は、今も各地に現存している。しかし、従来の須弥山儀の研究は、和時計関係者による機械部分の調査が主であり、梵暦運動との関係を踏まえた様式研究はあまりなされていない。

円通没後に、梵暦運動は科学としての理論の整合性を重視する同四時派と、より宗教的結社の色彩が強い異四時派に二分化されることになる。全国各地に現存する須弥山儀の様式の多様性は、こうした梵暦運動の歴史的展開と深い関わりがある。